

「免疫炎症制御セミナー」を開催

2014年3月14日

3月14日（金）にがん進展制御研究所棟4階会議室において、東京薬科大学生命科学部・免疫制御学研究室・准教授 浅野謙一先生を迎え、「CD169陽性マクロファージによる免疫制御」と題して、がん進展制御研究所免疫炎症制御セミナーを開催しました。

セミナーでは、CD169マクロファージの分布、死んだ腫瘍細胞の貪食と腫瘍免疫を活性化する抗原提供細胞としての役割、炎症性腸疾患の病態形成にかかわる自然免疫応答のエフェクター細胞としての役割などについて、最新の研究成果を交え大変分かりやすく講演して頂きました。

セミナーには、所内外の研究者並びに大学院生ら20名が参加し、とても活発な質疑応答や意見交換が行われました。



がん進展制御研究所 免疫炎症制御セミナー

CD169 陽性マクロファージによる免疫制御

演者

東京薬科大学生命科学部・免疫制御学研究室・准教授

浅野 謙一 先生

日時：平成26年3月14日(金) 17:00~18:00
場所：金沢大学がん進展制御研究所 4F 会議室

マクロファージは常在する臓器によって、機能、分化経路、表現型が異なる多様な細胞集団です。私たちの研究室では CD169 分子を発現し、主として2次リンパ臓器に局在するマクロファージの亜集団に着目し、その機能解析を進めてきました。そして、リンパ節に常在する CD169 陽性マクロファージががん死細胞を貪食し、附随する抗原を CD8T 細胞にクロスプレゼンテーションして活性化することを発見しました。CD169 陽性マクロファージを消失したマウスでは、がん抗原特異的 T 細胞を活性化できないことから、同マクロファージががん細胞死に伴う免疫活性化の責任細胞であることが示唆されます。以上の知見は CD169 陽性マクロファージが血流やリンパ流を介して流入する抗原を取り込み、その抗原の性質に応じて異なる免疫応答を惹起する特殊な細胞集団である可能性を示します。

最近我々は、CD169 陽性マクロファージが消化管粘膜固有層にもわずかながら存在することを発見しました。消化管は生体における最大のバリア臓器であり、CD169 陽性マクロファージが粘膜免疫の制御にも何らかの重要な役割を担う可能性が考えられます。本セミナーでは、炎症性腸疾患の病態形成における同マクロファージの役割について最新の研究成果を報告します。

連絡先：がん進展制御研究所・免疫炎症制御研究分野・須田貴司・内線（6720）